

『制作へ』 正誤表

本書に下記の通り誤りがございました。訂正してお詫び申し上げます。

なお、重版の場合は、すでに訂正が反映されている場合もございますので、ご了承ください。

ページ	該当箇所	誤	正
18	本文 17 行目	あなたを覗き込んでいるあなたに覗き込まれているのだから	あなたを覗き込んでいるのだから
33	本文下から 6 行目	『絵画の準備を』	『絵画の準備を！』
34	本文 17 行目		
35	本文下から 2 行目		
176	本文 1 行目	モノは意識のうえで現象として扱われるというよりも、その都度、なんらかの目的によってネットワーク化（道具連関）されることによって、実践的に捉えられる。つまり、目的が変われば、その道具の使用方法も変化する。そして、その都度の目的に応じて、それぞれの道具のネットワークは変化するのであり、人にとっての「距離」も変化する。目的の変化によって、さまざまな道具がある仕方で関係性のネットワークの中に置かれる。日常における距離とは目的に対する「近さ」や「遠	モノは意識のうえで現象として扱われるというよりも、その都度、なんらかの目的によってネットワーク化（道具連関）されることによって、実践的に捉えられる。霜山博也氏はハイデガーの道具分析における空間性を次のように論じている。 そのつどの目的を持った配慮的な気遣いに応じて、それぞれの道具の関係性は変化するのであり、現存在にとっての《近さ》や《遠さ》も変化するのだ。配慮的な気遣いの変化によ

		<p>さ」であり、質的な意味や価値を持ったものである。それは、客観的あるいは科学的な距離とは何の関係もない。日常空間は「近さ」や「遠さ」が目的に応じて多様な仕方で変化するシステムであり、質的に変容する空間なのである。</p>	<p>って遠ざかりは奪取され、さまざまな道具がこれまでとはことなった関係性に置かれる。ハイデガーにとっての距離とは、現存在の配慮的な気遣いによる目的にとっての《近さ》や《遠さ》であり、質的な意味や価値を持ったものである。³</p> <p>つまり、目的が変われば、その道具の使用方法も変化するのだ。それは、客観的あるいは科学的な距離とは何の関係もない。日常空間は「近さ」や「遠さ」を目的に応じて多様な仕方で変化するシステムであり、質的に変容する空間なのである。</p> <p>(及び、以降の脚注の番号を1ずつ加算)</p>
193	脚注		<p>(追加)</p> <p>3 霜山博也「ハイデガーの時空間における枠組みとしての〈物〉」『哲学の探求』第43号(哲学若手研究者フォーラム、2016.5) p.144</p> <p>(及び、以降の脚注の番号を1ずつ加算)</p>